國語法階梯

永井一孝 著
岡田正美 補

東京 大日本圖書株式會社

文部省圖書

國語法階梯凡例

一　本書は、我が國に於ける文字・音韻の變轉・假字遣・單語の類別を敘述したるものなり。

一　本書に用ゐたる文法上の名稱は、大方、世間に慣用せらるゝものを採れり。されども分類上の必要より新しき名稱を用ゐたるところもあり。

一　本書に散見せる字音の假字遣は、すべて、表音法に從ひたり。

一　假字遣は、國語のみ字音のみ、紛れやすきものゝ中にて、最も普通なるものゝみを擧げ、廢語と難字とは省略せり。

一　國語假字遣は、記臆に便せんがために、語源の同一なるものを連記し、且つ、其のはじめなる語の頭に黑點を附して他の語源より來たれるものと區別し、更に、搜索に便せんがために、紛れやすき假字の所在に隨つて、之を三段に分けて掲げたり。

一　字音假字遣も、亦、搜索に便せんがために、字形の似たるものを連記し、且つ、其の一群毎に、其等の文字の似たる部分を白字にて現はしたり。これ、著者の意見にては、字音假字遣は、平素は表音法に從ひ只特別の必要ある場合にのみ本來のものを用ゐし

めんとするにあるを以て、かく計らひたるなり。そこに演習問題を欠きたるも、同一の理由に依れるなり。

一　本書の演習問題には所要の答解を得がたきものをも掲げたり。

一　本書は中學校・師範學校・高等女學校及び是等と同程度なる諸學校の教科書として編述したるものなり。

一　本書は、岡田氏の『新式日本文法』の上卷と相並びて、其の中卷に接續することを得べく、又單語の説明よりはじめたる・あらゆる文法書に接續するを得べし。

一　本書編述の順序及び體裁は岡田氏と余との協定に成り、余編述の任に當り、岡田氏補訂の勞を採りたり。

明治三十三年五月下旬

永井一孝識

國語法階梯目次

第一編　文字……一

第一章　總説……一

第一　言語……一

第二　文字……一

第三　假字・漢字……二

第二章　假字……三

第一　平假字・片假字……三

第二　平假字……三

第三　片假字……五

第四　行段……七

第五　母韻假字・子音假字……七

第六　濁音・半濁音の假字……八

第七　清音假字……一九
第八　拗音假字……一〇
第九　直音假字……一一
第十　撥呼音假字……一二
第十一　促呼音假字……一二
第十二　長呼音符……一三
第十三　踊字……一三
〔演習〕……一四
第三章　漢字……一六
第一　漢字……一六
第二　漢字の數……一六
第三　和字……一六
第四　韻……一七
第五　部首……一八

第六　偏・旁・冠……二〇
第七　書體……二〇
第八　音讀・訓讀……二二
第九　字音……二二
第十　漢語……二四
第十一　連聲……二四
第十二　振假字……二五
第十三　送假字……二五
第十四　踊字……二六
〔演習〕……二六
第二編　音韻の變轉……二六
第一章　音便……二九
第一　伊音便……二九
第二　字音便……三〇

第三　撥呼音便……三三
第四　促呼音便……三五
〔演習〕……三七
第二章　音通……三九
第一　縱通……四〇
第二　横通……四〇
〔演習〕……四一
第三章　略音……四四
第一　阿行略音……四四
第二　伊段略音……四五
第三　耳行略音……四六
第四　二音重復略音……四七
〔演習〕……四八
第四章　約音……五〇

〔演習〕……五一
第五章　延音……五三
〔演習〕……五四
第六章　轉呼音……五六
〔演習〕……五七
第三編　假字遣……五九
第一章　總說……五九
第二章　國語假字遣……六二
第一　「い」「ゐ」「ひ」の區別……六二
〔演習〕……六七
第二　「う」「ふ」の區別……六九
〔演習〕……七一
第三　「え」「ゑ」「へ」の區別……七三
〔演習〕……八〇

第四　「ゐ」「を」「ぼ」の區別……八二
〔演習〕……八九
第五　「は」「わ」の區別……九一
〔演習〕……九五
第六　「じ」「ぢ」の區別……九八
〔演習〕……一〇二
第七　「ず」「づ」の區別……一〇四
〔演習〕……一〇六
第三章　字音假字遣……一一〇
第一　「あう」「あふ」「おう」「わう」の區別……一一二
第二　「ゐ」「ゑ」の區別……一一三
第三　「ふう」「ゆう」「ゆふ」の區別……一一四
第四　「え」「ゑ」の區別……一一四
第五　「ゑ」「を」の區別……一一五

第六　「かう」「こう」「かふ」「こふ」「くゃう」の區別……一一六
第七　「きう」「きふ」「きゃう」の區別……一一七
第八　「けう」「けふ」「きょう」「きゃう」の區別……一一七
第九　「さう」「さふ」「そう」の區別……一一八
第十　「しう」「しふ」「しゅう」「しゃう」の區別……一一九
第十一　「せう」「せふ」「しょう」「しゃう」の區別……一一九
第十二　「たう」「たふ」「とう」「たう」の區別……一二〇
第十三　「ちう」「ちふ」「ちゅう」「ちゃう」の區別……一二一
第十四　「てう」「てふ」「てう」「ちょう」「ちゃう」の區別……一二二
第十五　「なう」「なふ」「のう」の區別……一二三
第十六　「にう」「にふ」の區別……一二三
第十七　「ねう」「ねふ」「にょう」「にゃう」の區別……一二三
第十八　「はう」「はふ」「ほう」「ほふ」「ぼう」の區別……一二四
第十九　「へう」「ひょう」「ひゃう」の區別……一二五

第二十　「まう」「ゐう」の區別……一二五
第二十一　「めう」「みゃう」の區別……一二五
第二十二　「やう」「よう」「えう」「えふ」の區別……一二六
第二十三　「らう」「らふ」「ろう」の區別……一二七
第二十四　「りふ」「りう」「りゅう」の區別……一二七
第二十五　「れふ」「れう」「りょう」「りゃう」の區別……一二八
第二十六　「じ」「ぢ」の區別……一二九
第二十七　「ず」「づ」の區別……一三〇
第二十八　「くゃ」「くゎ」の區別……一三〇

第四編　單語の類別……一三一
第一章　名詞……一三五
〔演習〕……一三五
第二章　代名詞……一三六
第三章　動作詞……一三八
〔演習〕……一三九
第四章　存在詞……一四〇
〔演習〕……一四二
第五章　狀態詞……一四三
〔演習〕……一四五
第六章　添詞……一四六
〔演習〕……一四八
第七章　副詞……一四九
〔演習〕……一五〇
第八章　接續詞……一五一
〔演習〕……一五三
第九章　助用詞……一五四
〔演習〕……一五五

〔字音假字遣の便法〕……一三一

第十章　豆爾乎波……一五六
〔演習〕……一五八
第十一章　感歎詞……一五九
〔演習〕……一六〇
第十二章　詞の品類……一六一
〔演習〕……一六二
國語法階梯目次終……一六三

國語法階梯

永井一孝著
岡田正美補

第一編　文字

第一章　總說

第一　言語

人の音聲の意義あるものを言語といふ。

第二　文字

言語を形ある符號にうつしたる其の符號を文字といふ。

文字
總說
言語
文字

文字は、又、單に**字**ともいふ。

第三　假字・漢字

現今、我が國にて國語をうつす文字に、**假字**と**漢字**との二種あり。

假字は主として音を表し、漢字は主として意義を表す。

假字
平假字
片假字
平假字

第二章　假　字

第一　平假字・片假字

現今、我が國にて用ゐる假字に、**平假字**と**片假字**との二種あり。平假字も片假字も、元來、漢字の偏傍を省略して作りたるものなり。平假字は其の草書より出でたり。片假字は其の楷書より出でたり。

第二　平假字

現今、普通に用ゐる平假字の字數は、すべて、四十七箇なり。其の字形及び排列の順序は左の如し。

いろはに　ほへと
ちりぬる　を

わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

此の外、又、變體假字といふものあり。其の主なるものゝ字形は左の如し。

仏　ゑ、い、を、寸
ゟ、ゐ、ゑ　百
ヿ　ヱ、ヰ
ヷ、ゐ、ゑ　ヶ、家
ヸ　ヲ

變體假字

ゑ、ゑ　毛、ろ
ゐ、ゐ　ゑ、ゑ、ゐ、れ
ゐ　字
ゑ、ゑ　ゑ、乃
ゑ　ゑ、ゑ、ゑ
ゑ、ゑ　ゑ、ゑ
ゑ　ゑ、ゑ
ゑ、ゑ　ゑ、ゑ
ゑ　ゑ
ゑ、ゑ　ゑ

平假字は、又、一にいろは假字ともいふ。

變體の平假字は、又、一に草假字ともいふ。

第三　片假字

いろは假字
草假字
片假字

片假字の字數は、本來は、五十箇あり。其の字形及び排列の順序は左の如し。

ア	イ	ウ	エ	オ					
カ	キ	ク	ケ	コ					
サ	シ	ス	セ	ソ					
タ	チ	ツ	テ	ト					
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ					
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ					
マ	ミ	ム	メ	モ					
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ					
ラ	リ	ル	レ	ロ					
ワ	ヰ	ヲ	ヱ	ヲ					

五十音圖

世に、之を**五十音圖**と云ふ。此の圖は國語學上甚だ必要なるものなり。充分に暗記しおくべし。

ゐ・ゑ・を の三字は普通入用ならざるが故に、之を廢して、代にイ・エ・ウ・を用ゐる。されば字數は實は四十七字なり。されども、便宜を以て、普通には、尙ほ五十音と呼ぶなり。

第四　行段

五十音圖の中、「ア・イ・ウ・エ・オ」の縱の行を阿行と呼び、「カ・キ・ク・ケ・コ」の縱の行を加行と呼ぶ。此の外、佐行・多行・奈行・末行・波行・也行・良行・和行、皆、之に倣ふ。

五十音圖の中、「ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ」の横の列を阿段と稱へ、「イ・キ・シ・チ・ニ・ヒ・ミ・イ・リ・ヰ」の横の列を伊段と稱ふ。此の外、宇段・衣段・於段、皆、之に倣ふ。

第五　母韻假字・子音假字

五十音圖に於ける阿行の五字を**母韻假字**といふ。餘を**子音假字**といふ。

濁音・半濁音の假字

第六　濁音・半濁音の假字

前に擧げたる假字の外に、**濁音**及び**半濁音**の假字あり。濁音及び半濁音の假字は特別に作られたるものなし。故に、

濁音假字は

ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ
が　ぎ　ぐ　げ　ご

ザ　ジ　ズ　ゼ　ゾ
ざ　じ　ず　ぜ　ぞ

ダ　ヂ　ヅ　デ　ド
だ　ぢ　づ　で　ど

清音假字

バ　ビ　ブ　ベ　ボ
ば　び　ぶ　べ　ぼ

の如く、片假字又は平假字の右肩に二箇の點を加へて用ゐる。又、

半濁音假字は

パ　ピ　プ　ペ　ポ
ぱ　ぴ　ぷ　ぺ　ぽ

の如く、片假字又は平假字の右肩に一箇の圈點を加へて用ゐる。

第七　清音假字

濁音及び半濁音の假字に對して「カ」「サ」「タ」「ハ」の如く、標點なき假字を**清音假字**といふ。

第八　拗音假字

「寄宿舎」の「舎」「旅人」の「旅」の如き音をあらはす假字を拗音假字といふ。拗音假字も、亦、特別に作られたるものなし。故に、片假字又は平假字を借りて、

キャ	キュ	キョ	きゃ	きゅ	きょ
ギャ	ギュ	ギョ	ぎゃ	ぎゅ	ぎょ
シャ	シュ	ショ	しゃ	しゅ	しょ
ジャ	ジュ	ジョ	じゃ	じゅ	じょ
チャ	チュ	チョ	ちゃ	ちゅ	ちょ
ヂャ	ヂュ	ヂョ	ぢゃ	ぢゅ	ぢょ
ニャ	ニュ	ニョ	にゃ	にゅ	にょ
ヒャ	ヒュ	ヒョ	ひゃ	ひゅ	ひょ

ビャ	ビュ	ビョ	びゃ	びゅ	びょ
ピャ	ピュ	ピョ	ぴゃ	ぴゅ	ぴょ
ミャ	ミュ	ミョ	みゃ	みゅ	みょ
リャ	リュ	リョ	りゃ	りゅ	りょ
クヮ	クェ	クヲ	くゎ	くゑ	くを
グヮ	グェ	グヲ	ぐゎ	ぐゑ	ぐを

の如く、綴り合せて用ゐる。

（注意）拗音假字は下の方にある文字を上にある文字の下稍右方へ寄せて小く記すべし。

拗音假字にも清・濁・半濁の別あること、上の表に見えたるが如し。

第九　直音假字

拗音假字に對して「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」の如き假字を**直音假字**といふ。

撥呼音假字

第十　撥呼音假字

「ヂ」「ビ」「ピ」の如き假字又は「ギ」「讀んで」「飛んで」の如く、氣息を鼻孔へ洩して壓し出すが如き音をあらはす假字を**撥呼音假字**といふ。其の假字は左の如し。

ン（片假字）　ん（平假字）

促呼音假字

第十一　促呼音假字

「依って」「もっぱら(專)」の如く氣息の促(ツマル)る如き音をあらはす假字を**促呼音假字**といふ。促呼音假字は特別に作られたるものなし。故に、

片假字の中には、

依ッテ　モッパラ

などの如く、片假字の「ッ」を借りて用ゐる、

平假字の中には、

依って　もっぱら

などの如く、平假字の「つ」を借りて用ゐる。

（注意）促呼音假字も、亦、上字の下稍右方へ寄せて小く記すべし。

長呼音假字

第十二　長呼音符

「アルコール」「ポテトー」の如く、一音の韻(ヒビキ)の長く延ぐことを示す符號「ー」を**長呼音符**といふ。

長呼音假字平假字の區別なし。

踊字

第十三　踊字

「チチ」「タビタビ」の如く、同じ假字を一箇又は二箇以上重ね

て記す場合には、下の假字の代に、

片假字には、

ゝ（一字に代用するもの）　〳〵（二字以上に代用するもの）

平假字には、

丶（一字に代用するもの）　〲（二字以上に代用するもの）

の如き符號を用ゐることあり。之を踊字といふ。

〔演習〕

【一】平假字及び片假字の數は各幾何なるか。何故に其の數に相違あるか。

【二】變體假字十箇を擧げよ。

【三】ヱ行の假字を擧げよ。

【四】於段の假字を擧げよ。

【五】「モ」といふ假字は何行に屬するか。

【六】「レ」といふ假字は何段に屬するか。

【七】「ネ」といふ假字は何行何段なるか。

【八】「コ」といふ假字は何行何段なるか。

【九】濁音假字十箇・半濁音假字五箇を平假字にて示せ。

【十】拗音假字十箇を片假名にて示せ。

【十一】清音假字及び直音假字各十五箇を平假名にて示せ。

【十二】促呼音假字にて記すべき詞十箇を擧げよ。

【十三】撥呼音假字にて記すべき詞十五箇を擧げよ。

【十四】長呼音符を用ゐるべき詞五箇を擧げよ。

【十五】踊字を用ゐるべき詞十箇を擧げよ。

漢字

漢字

漢字の數

和字

第三章　漢字

第一　漢字

支那國の文字の我が國に傳はりたるものを、すべて、漢字といふ。

第二　漢字の數

漢字の數は、支那の字典に據れば、凡そ、四五萬もあるべし。現今、我が國にて用ゐる文字は三千乃至五千なり。

第三　和字

漢字の外に、漢字の形を成せる文字數十箇あり。

例へば、

榊（サカキ）　辻（ツジ）　迚（トテモ）　適（アッパレ）　凩（コガラシ）　凪（ナギ）　禁（フセト）

畫

峠（タウゲ）　杜（モリ）　咄（ハナシ）　噺（サシ）　躾（シツケ）　聽（ナガテ）

などの如し。是等は支那國より傳はりたる文字にあらず、我が國にて作りたるものなり。これを和字といふ。

（注意）和字は支那の字典にはなし。

第四　畫

漢字を書くに其の一筆々々を畫といふ。

例へば、

一といふ字は一畫より成り、
人といふ字は二畫より成り、
口といふ字は三畫より成り、
天といふ字は四畫より成り、
地といふ字は六畫より成れるが如し。

漢字の畫の、最も少きは一畫、最も多きは、龗・龜又は龖などの如く、五十餘畫なるものあり。

第五　部首

漢字は、すべて、字形によりて部類を分つ。

例へば、

松・杉・柳・などの如く、木の字あるを木の部とし、
地・堀・坂・などの如く、土の字あるを土の部とし、
收・改・政・などの如く、文の字あるを文の部とし、
功・助・勅・などの如く、力の字あるを力の部とし、
雲・雪・霜・などの如く、雨の字あるを雨の部とし、
笄・笠・笛・などの如く、竹の字あるを竹の部とする

が如し。

其の他、口・女・山・言・魚・鳥・馬・辶・走・など、皆、之に倣ふ。

以上を總稱して**部首**といふ。

部首は、字典につきて字を求むる時に用あり。其の數およそ二百十四あり。

部首の中の主なるものにて、特別の名稱あるもの左の如し。

亻（ニンベン）	彳（ゼンニンベン）	刂（リットウ）	冖（ワカンムリ）	廾（ソウニョウ）	
冫（ニスイ）	氵（サンズイ）（水）	广（カンダレ）	宀（マダレ）	尸（シカバネ）	
忄（リッシンベン）（心）	扌（テヘン）	禾（イネヘン）	疒（ヤマヒダレ）	欠（アクビ）	
灬（レンガ）（火）	殳（ルマタ）	示（シメスヘン）	衤（コロモヘン）（衣）	門（カドガマエ）	
辶（シンニョウ）（辵）	辶（ソウニョウ）走	月（ニクヅキ）（肉）	犭（イヌヘン）（犬）	阝（コザト）（阜）	
阝（オホザト）（邑）	隹（フルトリ）	頁（オホガヒ）	言（ゴンベン）	阝（コザト）（邑）	
酉（ヒヨミトリ）					

偏傍冠

第六　偏・旁・冠

松・地・明・の木・土・日・などの如く、文字の左側にある部分を**偏**といふ。

收・功・斜・の文・力・斗・などの如く、文字の右側にある部分を**旁**といふ。

岩・笠・雲・の山・竹・雨などの如く、文字の頭にある部分を**冠**といふ。

漢字には、假字の如く、一定したる排列法なし。通例、先づ部首に依りて類別し、次に其の一部内に於いて、畫の少き文字を初とし、畫の多きものを次として、順次列擧す。普通の字典は、皆、此の順序を採る。

書體

第七　書體

漢字には楷書・行書・草書・隷書・篆書・明朝・清朝などの書樣（カキカタ）あり。これを松・竹・梅・の三字に就いて例せんに、

楷書には　松　竹　梅
行書には　松　竹　梅
草書には　松　竹　梅
隷書には　松　竹　梅
篆書には　松　竹　梅
明朝には　松　竹　梅
清朝には　松　竹　梅

と書するが如し。これを書體といふ。

是等の諸體の中、通常寫字に用ゐるは楷書・行書・草書・の三種なり。隷書・篆書・の二體は、稀に、印刻又は題字などに

用ゐる。明朝と清朝とは印刷物にのみ用ゐる。
楷書は、又、一に眞書ともいふ。
明朝と清朝とは、もと楷書の一體に過ぎず。今は印刷に用ゐる文字に就いて是等の區別をなす。

第八　音讀・訓讀

漢字は、一字にて、それがしの音を表し、又、それがしの意義を含む。故に、我が國にて之を用ゐるに當りては、
上・下・左・右の如く、音のまゝに唱ふることあり、
又、上・下・右・左の如く、國語を當てゝ、讀むこともあり。
音のまゝに唱ふるを音讀といひ、國語を當てゝ讀むを訓讀といふ。

第九　字音

訓讀
音讀
字音

漢字の音の我が國に傳はりたるものに、吳音・漢音・唐音あり。例へば、
行といふ文字を
行儀の如くに讀めば吳音。
歩行の如くに讀めば漢音。
行燈の如くに讀めば唐音。
となるが如し。されども、漢字は、すべて、字毎に是等の三種の音を具するにあらず。吳・漢の音同一なるものもあり。
我が國に傳はりたる漢字の音には、吳音最も多し。漢音は之に次ぐ。唐音は甚だ稀なり。
是等の諸音の中には、我が國に傳はりて後、稍其の原音の轉訛したるものもあり。

漢字音

漢語

連聲

吳音・漢音・唐音・の外、近來、又、淸音も傳はりたり。例へば、上(シヤウ)海(ハイ)・厦(アモイ)門・などの如し。されど、此の音は、未だ、我が國の事物には用ゐられたるものなし。

吳音も漢音も唐音も亦轉訛したる音も、すべて**漢字音**といふ。漢字音は、又略して、單に**字音**ともいふ。

和字は、前に述べたる如く、我が國にて作りたる文字なるが故に、通常訓のみありて音なし。

第十　漢語

字音にてあらはしたる語を、すべて**漢語**といふ。故に、漢語の中には吳音も漢音も唐音も亦轉訛したる音も入りをり。

第十一　連聲

振假字

送假字

漢字は、三位(サン)・善惡(ゼンアク)・石橋(キツケウ)・學校(ガツカウ)・本阿彌(ホンアミ)・などの如く、二字以上の音を連呼する時は、原音を變じて他の音に唱ふることあり。之を**連聲**といふ。

第十二　振假字

上(シヤウ)・下(ゲ)・左(サ)・右(ウ)、又は、松(マツ)・竹(タケ)・梅(ウメ)・などの如く、漢字の音訓を知らしむるために、漢字の傍に假字を添へて書くことあり。之を**振假字**といふ。

第十三　送假字

甚だ・最も・未だ・見る・見はる・覆ふ・覆す・聞く・聞こゆ・などの如く、音讀と訓讀との紛れやすきもの、若しくは、數樣に訓讀せらるべきものには、漢字の下に假字を添ふることあり。之を**送假字**といふ。

送假字は紛れやすき憂あるところより添ふるを常とす。

第十四　踊字

漢字にても、萬々・珍重々々・ますます・ますますの如く、同字を重ねて書くべき場合には、符號にて之を示すことあり。この符號を、亦、踊字といふ。

〔演習〕

【一】漢字の音訓を知らんとして之を字典中より搜索するには如何にするか。

【二】左の各文字の畫を示せ。

母　惑　離　瀧　嶽

【三】左の各文字の部首を示せ。

踊字

演習

岳　剪　郵　鷹　分

【四】左の各文字は如何にして字典中より求むるか。

怪　岡　國　寒　胴

【五】特別の名稱ある部首十五箇を擧げよ。

【六】左の各文字の書體は何か。

池　卷　雄　本　宮

【七】左の各文字の音と訓とを示せ。

人　空　生　物　學

【八】字音の中には幾種の音を含有するか。

【九】和字と漢字との異同は如何。

【十】假字と和字との相違せる點は如何。

【十一】連聲に唱ふべき漢字の例八箇を擧げよ。

【十二】振假字及び送假字とは如何なるものなるか。

【十三】左の漢字に送假字を加へよ。

遣（ツカハス）　失（ウシナフ）　榮（サカエ）　即（スナハチ）

記（シルス）　起（オコス）　從（シタガツテ）　沈（シヅンデ）

老（オイテ）　陷（オトシイル）

【十四】左の送假字の誤謬を正せ。

隨て　行なふ　歌ふ　聞かす

異る　變はる　與たふ　組み合て

別て　固とより

【十五】漢字典と國語辭典とに、體裁に於いて差異ありや、否や、詳說せよ。

音韻の變轉

音便

第二編　音韻の變轉

第一章　音便

發音の便に隨ひて、原音を他の母韻、又は撥呼音、又は促呼音に呼換ふることあり。例へば、

白き布―白い布

清く―清う

澄みて―澄んで

依りて―依つて

などの類なり。之を音便といふ。

音便にて呼換へたる音の假字は、原音の如何に係はら

ず、凡て、呼換へたる音の假字に書き替ふ。

音便に左の四種あり。

第一　伊音便

つきたち(朔)――ついたち

書きて――書いて

さきつころ(先頃)――さいつころ

などの如く、「き」を「い」に呼換ふることあり。

又、

遠し――遠い

近し――近い

まして(況)――まいて

などの如く、「し」を「い」に呼換ふることあり。

又、

しか(詩歌)――しいか

むか(六日)――むいか

などの如く、「い」を添へて唱ふることあり。

是等をすべて伊音便といふ。

第二　宇音便

輕く――輕う

重く――重う

美しく――美しう

などの如く、「く」を「う」に呼換ふることあり。

又、

隨ひて――隨うて

沿ひて――沿うて
あきひと（商人）――あきうど

などの如く「ひ」を「う」に呼換ふることあり。

又、

いもおと（妹）――いもうと
かゝぶり（冠）――かうぶり
はゝき（箒）――はうき
さぶらふ（候）――さうらふ
つかへまつる（仕）――つかうまつる
なほし（直衣）――なうし
やまだ（山田）――やうだ
かみつけ（上野）――かうつけ

ひむか（日向）――ひうが
とりで（取出）――とうで
まゐで（詣）――まうで
まをす（申）――まうす

などの如く、「お・か・く・は・ふ・へ・ほ・ま・み・む・り・ゐ・を」の十二音を「う」に呼換ふることあり。

又、

ふふ（夫婦）――ふうふ
やか（八日）――やうか

などの如く「う」を添へて唱ふることもあり。

是等を、すべて、**宇音便**といふ。

第三　撥呼音便

止み て―止ん で
汲み て―汲ん で
飲み て―飲ん で

などの如く、「み」を撥呼音「ん」に呼換ふることあり。

又、

飛び て―飛ん で
學び て―學ん で
呼び て―呼ん で

などの如く、「び」を撥呼音「ん」に呼換ふることあり。

又、

みな（皆）―みん な
ずば（不者）―ずん ば

などの如く、撥呼音「ん」を添へて唱へ、或は、

もんじ（文字）―もじ
あんない（案内）―あない

などの如く、撥呼音「ん」を省きて唱ふることあり。

是等を、すべて、**撥呼音便**といふ。

第四　促呼音便

勝ち て―勝っ て
討ち て―討っ て
持ち て―持っ て

などの如く、「ち」を促呼音「つ」に呼換ふることあり。

又、

買ひ て―買っ て

戰ひて――戰つて
養ひて――養つて

などの如く、「ひ」を促呼音「つ」に呼喚ふることあり。

又、

去りて――去つて
賣りて――賣つて
語りて――語つて。

などの如く、「り」を促呼音「つ」に呼喚ふることあり。

又、

またく(全)――まつたく
もはら(專)――もつぱら

などの如く、促呼音「つ」を添へて唱ふることあり。

是等を、すべて**促呼音便**といふ。

〔演習〕

【一】音便とは如何なるものなるか。
【二】伊音便にて轉じたる詞十五箇を擧げよ。
【三】宇音便にて轉じたる詞十五箇を擧げよ。
【四】撥呼音便にて轉じたる詞十五箇を擧げよ。
【五】促呼音便にて轉じたる詞十五箇を擧げよ。
【六】宇音便にて轉ずる原音は何々なるか。
【七】伊音便にて轉ずる原音は何々なるか。
【八】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

沿ふて　寒い日　向ふて
行うて　青ひ色　美しい人
仰ひで　をしひかな

【九】左の文章中に誤謬あらば正せ。

私は川に沿て町へ行った。

日は照っても雨は降る。

人を雇ふて山路を越ゆ。

笑て、慍って、後で泣ひた。

【十】左の音便の原音を擧げよ。

貰って　給うて　さいたま（埼玉）

就いて　待って　及んで

降って　咲いて

第二章　音通

發音の便に隨ひて、或音を他の子音に呼喚ふることあり、例へば、

さけ（酒）―さかや（酒屋）

あめ（雨）―あまがさ（雨笠）

うへ（上）―うばがみ（上紙）

たはぶれ（戯）―たはむれ

などの如し。之を音通といふ。

音通には、五十音圖に於ける、同行の音に轉ずるものと、同段の音に轉ずるものとあり。

音通は、慣例あるものゝ外、妄りに變轉せしめず。

縱通

第一　縱通（タテツカヨヒ）

たけ（竹）――たかばうき（竹箒）
かぜ（風）――かざぐるま（風車）
かね（金）――かなもの（金物）
こゑ（聲）――こわいろ（聲色）

などの如きは、何れも同行の音に轉じたるものなり。かくの如く轉ずるを縱通といふ。

縱通の中にては、衣段の音が阿段の音に轉ずるもの最も多し。伊段の音の宇段・衣段・於段に轉ずるもの、及び宇段の音の於段の音に轉ずるものは之に次ぎて多し。

横通

第二　横通（ヨコツカヨヒ）

けぶり（煙）――けむり
しまらく（暫）――しばらく
みそか（密）――ひそか
さびし（淋）――さみし

などの如きは、何れも同段の音に轉じたるものなり。かくの如く轉ずるを横通といふ。

演習

【演習】

【一】音便とは如何なるものなるか。
【二】音通に幾種あるか。
【三】縱通の例十五箇を擧げよ。
【四】横通の例十五箇を擧げよ。
【五】音通の規則に從はゝ、如何なる音にても任意に轉ぜしめ得

べきか。

【六】左の音通に就いて其の縱横を別て。

はづか(僅)――わづか

はるあめ(春雨)――はるさめ

きのは(木の葉)――このは

はなす(放)――はなつ

【七】音便と音通との別は如何。

【八】左の詞の中より音便と音通とを別て。

とぼしび(燈火)　ついたて(衝立)

こわだか(聲高)　おほいた(大分)

かうべ(神戸)

【九】音通の詞二十箇を擧げて、其の中の縱通の詞には圈點を附せよ。

【十】音便の詞二十箇を擧げて、其の中の字音便の詞には圈點を附せよ。

略音

阿行略音

第三章　略音

二音以上を連呼する時、發音の便に隨ひて、其の中の一音の略くることあり。例へば、

あかいし（明石）――あかし
かはばら（河原）――かはら
とみやま（富山）――とやま

などの如し。之を**略音**といふ。

略音は、普通、假字にうつし出さず。

略音は、慣例ありて、妄りに略くべからず。

略音に左の四種あり。

第一　阿行略音

伊の段略音

ますあらを（益荒雄）――ますらを
かりいほ（假庵）――かりほ
かはうち（河内）――かはち
よもぎれふ（蓬生）――よもぎふ

などの如く、阿行の「あ・い・う・お」の四音の略くることあり。之を**阿行略音**といふ。

この例なほ多し。

第二　伊段略音

かりいほ（假庵）――かりほ
やなぎがは（柳河）――やながは
あしたち（足立）――あだち
かぢとり（楫取）――かとり

良行略音

かには(樺)――かば
ちかひごと(誓言)――ちかごと
あみしろ(網代)――あじろ
まがりたま(曲玉)――まがたま

などの如く、伊段の「き・し・ち・に・ひ・み・り」の音の略くることあり。之を**伊段略音**といふ。

伊段にて略くる音は、すべて、八音なり。

第三　良行略音

まがりたま(曲玉)――まがたま
なぞらふ(擬)――なぞふ
かへるさ(歸)――かへさ
誰れが――たが

二音重複略音

こゝろぢ(心地)――こゝぢ

などの如く、「ら・り・る・れ・ろ」の音の略くることあり。之を**良行略音**といふ。

良行略音の例は少し。

良行にて略くる音は、すべて、五音なり。

第四　二音重複略音

たびびと(旅人)――たびと
かななべ(金鍋)――かなへ(鼎)

などの如く、二音重複する時は、其の一音の略くることあり。之を**二音重複略音**といふ。

二音重複略音の例は少し。

〔演習〕

【一】阿行略音の例十箇を擧げよ。

【二】伊段略音の例十五箇を擧げよ。

【三】音便・音通及び略音の別を、例を擧げて、述べよ。

【四】良行略音の例十箇を擧げよ。

【五】左の詞の中にて略けたる音を示せ。

みちのく(陸奥)　あぶみ(鐙)

をのへ(尾上)　やましろ(山背)

たらひ(盥)　ゆづる(弓弦)

やまが(山鹿)　いびき(鼾)

【六】左の詞の中にて音便と略音とを別て。

たかさご(高砂)　かはひ(河合)

かりうど(獵人)　しらが(白髮)

【七】左の詞の中にて音通と略音とを別て。

うなはら(海原)　かの(狩野)

あまざらし(雨曝)　はやと(隼人)

【八】左の詞の中にて、音便と音通と略音とを別て

あらいそ(荒磯)　こうぢ(小路)

やまがた(山縣)　なるみ(鳴海)

【九】二音重複略音の例五箇を擧げよ。

【十】左の詞の中にて、音便と音通とを別て。

書いて　きさい(皇后)

かうがい(笄)　やう〳〵(漸)

食うて　やいば(刃)

約音

第四章　約音

二音以上を連呼する時、發音の便に隨ひて、二音の一音に約まることあり。例へば、

さしあげ（指上）――さざげ（捧）
にしきおり（錦織）――にしごり
ながいき（長息）――なげき
あさおみ（朝臣）――あそみ

などの類なり。之を**約音**といふ。

約音は、漢學者の反切の法と稱するものと同じ。

約音も、亦古來慣例あるものゝ外、妄りに約すべからず。

演習

〔演習〕

【一】約音と略音との別を示せ。

【二】約音の例十五箇を擧げよ。

【三】「た」「へ」の約音及び「し」「か」の約音を問ふ。

【四】左の詞の中にて、約音と略音とを別て。

かりほ（假庵）　富めり
多かり　なるみ（鳴海）
もたげ（擡）

【五】左の詞の中にて、音便と約音とを別て

とよとみ（豐臣）　はるび（腹帶）
てうづ（手水）　はとり（服部）

【六】左の詞の中にて、音通と約音とを別て。

たまくら（手枕）　たゝかひ（戰）

うはつゝみ（上包）　あらなみ（荒波）

【七】約音と略音との例各十箇を擧げよ。

【八】音通と音便との例各十箇を擧げよ。

【九】左の詞の中にて、音通と略音と約音とを別て。

かるが故に　いくとせ（幾年）

ほかげ（火影）　かさぎやま（笠置山）

【十】約音と音通との例各五箇を擧げよ。

第五章　延音

二音以上を連呼する時、發音の便に隨ひて、其の中の一音を二音に呼換ふることあり。例へば、

いふ（曰）――いはく

消えぬ――消えなく

思へる――思へらく

歎き――歎かひ

などの類なり。之を**延音**と云ふ。

延音と約音とは全く正反對なり。

延音も、慣例あるものゝ外、妄りに延ぶべからず。

〔演習〕

【一】延音と約音との差異を、例を擧げて、述べよ。

【二】延音の例十箇を擧げよ。

【三】左の詞は如何なる詞の延びたるものなるか。

笑まひ　知らなく

思はく　見まく

宣らへ

【四】左の詞の中にて、延音と約音とを別て。

止まる　返さひ

戀ふらく　されば

延ばへ

【五】左の詞の中にて、略音と延音とを別て。

とこ（所）　申さく

をがむ（拜）　いづし（田石）

【六】左の詞の中にて、略音と約音とを別て。

おぢ（祖父）　つて（傳）

あらる（荒井）　あづま（吾嬬）

【七】約音と延音との例各五箇を擧げよ。

【八】左の詞の中にて、延音と音便とを別て。

あっぱれ　歌うて

謂うて　をっと（夫）

【九】左の詞の中にて、音便と音通と延音とを別て。

むらさめ（村雨）　もっとも（最）

掛けまく　ふうき（富貴）

【十】音便と延音との別を、例を擧げて、述べよ。

轉呼音

第六章　轉呼音

發音の便に隨ひて、假字を、其の原音のまゝに呼ばずして、他音に呼ぶことあり。例へば、

さいは。ひ。（幸）――さいわ。い。

かは。（河）――かわ。

あうむ（鸚鵡）――おうむ

どら。ふ（捕）――とろ。ふ

などの類なり。之を**轉呼音**といふ。

波行の五音「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、他の音の後にある時は、大方「わ・い・う・え・お」の如く呼ぶ。阿段の音と衣段の音とは、下に「う」又は「ふ」の來る時、阿段の音は、大方、於段の音の

如く呼び、衣段の音は、凡て、拗音の如く呼ぶ。

轉呼音の假字は、凡て、原音の假字を用ゐる。

〔演習〕

【一】轉呼音に讀まるゝ詞十箇を擧げよ。

【二】轉呼音と音便との差異を、例を擧げて、述べよ。

【三】轉呼せらるゝ音は幾何なるか。

【四】左の詞は如何に轉呼せらるゝか。

わう（王）　れうり（料理）

ゆふべ（夕）　はうむる（葬）

【五】左の詞の中にて、音便と轉呼音とを別て。

たうげ（峠）　かふ（買）

たふとし（貴）　さうらふ（候）

【六】「は」を「わ」に轉呼する詞十箇を擧げよ。

【七】「へ」を「ゑ」に轉呼する詞十箇を擧げよ。

【八】阿段の音を於段の音に轉呼する詞十箇を擧げよ。

【九】左の詞は如何に轉呼せらるゝか。

けふ（今日）　うれふ（愛）

てうづ（手水）　めうが（茗荷）

【十】轉呼音と約音との別を、例を擧げて、示せ。

第三編　假字遣

第一章　總說

假字の中に、音の紛れやすきもの數箇あり。

ぢ　ず

ぢ　ぞ

に於ける「れ」「を」の如き、または、

う　い

ふ　ぷ

に於ける「う」「ふ」の如き類なり。これらは、古くは、勿論、其の發音を分明に區別し得たるものなれども、後世に至りて、漸

く區別し得ざるに至りしなり。されども、なほ、古來の慣例によりて、

おぢ　は祖父の意を表し、
をぢ　は伯父・叔父の意を表し、
にう　は柔若しくは乳の字音を表し、
にふ　は入の字音を表す。

故に、是等の類同せる音を含める言語または字音を假字に書きあらはすに當りては、古來の慣例によりて、之を區別す。其の區別する法を假字遣といふ。

假字遣に國語假字遣と字音假字遣との二種あり。國語假字遣は、純粹なる國語の中にて、假字の用法の最も紛れやすきものを區別するものにて、字音假字遣は、字音を假字にあらはすに當りて、其の用法の最も紛れやすきものを區別するものなり。

假字遣
國語假字遣
字音假字遣

第二章　國語假字遣

國語を書きあらはす假字の中にて、最も紛れやすきものは左の七組十七音なり。

(一)　い……ゐ……ひ
(二)　う……ふ
(三)　は……ゐ……へ
(四)　お……を……ほ
(五)　は……わ
(六)　じ……ぢ
(七)　ず……づ

第一　「い」「ゐ」「ひ」の區別

「ゐ」は、一音なるとまたは一語の上部中部下部にあるとに拘はらず「い」の如く讀むことあり。

「ひ」は、一語の中部または下部にある時に限りて「い」の如く讀むことあり。

「ひ」が、一音なる時または一語の上部にある時には、決して「い」の如く讀むことなし。

故に「い」の如き音が、一音または一語の上部にある時は、

い（射）　いかり（錨）
ゐ（猪）　ゐもり（蠑螈）

などの如く「い」と「ゐ」と紛るゝことあり、一語の中部または下部にある時は、

ついたち（朔）　かい（櫂）

まゐる（參）　もとゐ（基）
あひだ（間）　てぬぐひ（手拭）

などの如く、「い」・「ゐ」・「ひ」、共に紛るゝことあり。

「ひ」は、一音なる時または一語の上部にある時には、「い」・「ゐ」と紛るゝことなし。

「い」と書くべき語

- い（射）
- い（鑄）
- い（寢）
- さいづち（柊楔）
- さいなむ（訶責）
- れい（老）
- かい（櫂）
- くい（悔）
- むくい（報）

此の外、音便にて「い」の假字を書くべきものあり。そは第二編第一章音便の條下に擧げたれば見るべし。

「ゐ」を書くべき語

- ゐ（井）
- ゐど（井）
- ゐもり（蠑螈）
- ゐ（堰）
- ゐぐひ（堰杭）
- ゐせぎ（堰堤）
- ゐ（猪・亥）
- ゐのこ（豕）
- ゐのしゝ（猪）
- ゐ（居處）
- ゐあひ（居合）
- はらゐせ（報怨）
- うなゐ（髫髮）
- いぬゐ（乾）

ゐざり（膝行・躙）　もちゐる（用）　かたゐ（乞見）
ゐなか（田舍）　くもゐ（雲居）
ゐる（居）　くらゐ（位）
しきゐ（敷居）
とのゐ（宿直）
とりゐ（鳥居）
なゐ（地震）
まとゐ（團欒）
もとゐ（基）

●ゐ（率・將）　ひきゐる（率・帥）
まゐる（參）

●ゐ（韻）　あぢさゐ（紫陽花）

●ゐや（禮）　あゐ（藍）
ゐやまふ（敬）　くれなゐ（紅）
ほゐ（大醫）
くわゐ（慈姑）
ふとゐ（莞）

右「い」「ゐ」と書くべきもの丶外、一語の上部にある「い」の如き音は、概ね「い」にて、一語の中部または下部にあるは、大方「ひ」なり。

〔演習〕

【一】「い」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【二】「い」音便にて轉じたる語十箇を擧げよ。

【三】「ゐ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【四】左の諸語に假字を附けよ。

杭　額　手拭　報　櫃

鯉　基　藍　間　魂

【五】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

鮯（ハヤ）　盲（メシヒ）　木が高い　青ひ色

鯛（タイ）　乾（カワヒ）　紅（クレナヒ）の絹。　花が美しい

【六】「ひ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【七】左の諸文章中の縱線を添へたる語に假字を附けよ。

病の起らぬ先に手當をせよ。

居候とて居食するものゝ謂にあらず。

亥中の月とは陰曆二十日の夜の月のことなり。

乞兒の團欒せる中に一人の覺の居たるを見たり。

慈姑とは葉のくいわれたる圃といふ義より出でたる語なり。

【八】左の諸文章中に假字遣の誤謬あらば正せ。

老ひたるちゐさき人と若きおほひなる人と道を行けり。

過を悔ひたらば直に之を改めよ。

若ひ人が泣ひて怒った。

向うばかり見て進む者をゐのしゝ武者といふ。

日頃（ヒゴロ）は居樣（イザマ）のわろき人が今日ばかりは禮（ヰヤ）を正して居（イ）たり。

【九】「い」「ゐ」「ひ」の假字は如何なる場合に紛るゝか。

【十】國語を書きわらはす假字の中にて紛れやすきものを對照せよ。

第二　「う」「ふ」の區別

「ふ」は、一語の中部または下部にある時に限りて「う」の如く讀むことあり。

「ふ」が、一音なる時または一語の上部にある時には、決して「う」の如く讀むことなし。

故に「う」の如き音が、一語の中部または下部にある時は、

（かうべ（神戸）　うう（植）
（あふみ（近江）　まふ（舞）

などの如く「う」と「ふ」と紛るゝことあり。

「ふ」が、一音なる時または一語の上部にある時には「う」と紛るゝことなし。

「う」と書くべき語

●うう（植）

「う」と書くべき語

演習

此の外、音便にて「う」の假字を書くべきものあり。そは第二編第一章音便の條下に擧げたれば見るべし。

右、「う」と書くべきものゝ外は、おほむね「ふ」の假字を書くべし。

●うう（飢）
●すう（据）

〔演習〕

【一】「う」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。
【二】「ふ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。
【三】「う」音便にて轉じたる語十五箇を擧げよ。
【四】「う」音便に轉ずる原音は幾箇あるか。
【五】左の諸語に假字を附けよ。

筭　夕　昨日　饑　帶
扇　峠　商人　葵　栽

【六】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

通う　妹　追ふて　厭ふ　仰ぐ
隨うて　願う　据ふ　吸ふ　近江

【七】左の諸文章中の縱線を添へたる語に假字を附けよ。

朝早う起きて手水をつかふ。
鹿を追ふ獵人は山を見ない。
格子を明くる拍子に筭を落した。
よく舅姑に事へ、よく家を治む。
兵を率ゐて大井河を渡る。

【八】左の諸文章中に假字遣の誤謬あらば正せ。

知らぬ事あらば問いて明らめよ。
流に沿ふて町へ出る。

思うて此に至れば大に快を覺ふ。
恩を受けば必ず報ふべし。
康保元年櫻樹を紫宸殿の南階の東に栽ゆ。明年橘樹を南階の西に栽ゆ。

【九】「い」音便にて轉じたる語十五箇を擧げよ。

【十】左の諸語に假字を附けよ。

酬　乾　今日　位　田舍
媒　謠　小路　朔　基

第三　「ゐ」「ゑ」「へ」の區別

「ゐ」は、一音なるときまたは一語の上部・中部・下部にあるときに拘はらず「ゐ」の如く讀むことあり。

「へ」は、一語の中部または下部にある時に限りて「ゐ」の如く讀むことあり。

「へ」が、一音なる時・または一語の上部にある時には、決して「ゑ」の如く讀むことなし。

故に「ゑ」の如き音が、一音・または一語の上部にある時は、

ゑ（得）　ゑびら（箙）
ゑ（笑）　ゑくぼ（靨）

などの如く「ゑ」と「ゑ」と紛るゝことあり、一語の中部または下部にある時は、

ひえどり（鵺）　さゞえ（榮螺）
すゑもの（陶器）　こずゑ（梢）
さへぎる（遮）　かなへ（鼎）

などの如く「ゑ」・「ゑ」・「へ」共に紛るゝことあり。

「へ」が、一音なる時・または一語の上部にある時・には、「ゑ」・

「ゑ」と紛るゝことなし。

「ゑ」と書くべき語

●ゑ（柄）

かもゑ（鴨柄）
ゝざゑ（榮螺）
ながゑ（轅・長柄）
ふゑ（笛）
のどぶゑ（吭）

●ゑ（愛）

ゑひめ（愛媛）

●ゑ（吉）

すみのゑ（住吉）
ひゑ（日吉）

●ゑ（得）

こゝろゑ（心得）

●に（枝）
●に（江）
●に（兄）
●にと（干支）

しづに（下枝）
ほづに（秀枝）
いりに（入江）
れほに（大兄）
きのに（甲）
ひのに（丙）
つちのに（戊）
かのに（庚）
みづのに（壬）
●はに（生）
ひに（粹）
ひこばに（蘖）

「ゑ」と書くべき語

●に（茜）
●にな（胞）
●にのき（榎）
●もにぎ（萌木）
もにき（萌黄）
●ひにどり（鵯）
●みに（外見）
●ぬに（鵺）
●はに（榮・映）
●はに（艇）

一語の下部にある「に」の音が「ゆ」の音に轉ずる語あり。例へば「覺に」が「覺ゆ」に轉ずるが如し。かゝる「に」の音は、必ず、こゝの「に」にて書きあらはすべし。

「ゑ」と書くべき語

●ゑ（笑）
ゑがほ（笑顔）
●ゑくぼ（靨）
こゑ（聲）

ゑむ（笑）

●ゑ（繪）

ゑどる（彩色）

ゑもとゆひ（繪元結）

●ゑ（餌）

ゑさし（餌差）

ゑづく（嘔吐）

ゑぶくろ（餌袋）

●ゑる（彫）

ゑぐる（彫）

ゑりいた（彫板）

ゑぐし（嶽）

ともゑ（巴）

ゑぐいも（蠍芋）

●ゑた（屠見）

●ゑふ（醉）

●ゑぼし（烏帽子）

●ゑんじゆ（槐）

●す ゑ（据）

いしずゑ（礎）

すゑもの（陶器）　つくゑ（机）

すゑふろ（据風呂）　つゑ（杖）

●すゑ（末）

こずゑ（梢）

●うゑ（植）

●うゑ（飢）

●ゆゑ（故）

右「に」「ゑ」と書くべきものゝ外、一語の上部にある「に」の如

き音は、概ね「ひ」にて、中部・下部にあるは、大方「へ」なりと知るべし。

〔演習〕

【一】上部に「え」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【二】「へ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【三】下部にある「え」が「ゆ」に云ひかへらるゝ語十箇を擧げよ。

【四】左の諸語に假字を附けよ。

浮世繪　妙　藍玉　鼎　紅
植木　苗　心得　梢　家

【五】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

絶　頭　扇子　箒　醉覺
衿頸　憂　笑壺　見へ　莞

【六】左の諸文章中の縦線を添へたる語に假字を附けよ。

外見を飾るは心の賤しき人に多し。
利に惑ふものゝ心も亦賤し。
あの子の笑顔は母に似て居る。
榎の梢に蟬の聲聞ゆ。
峠を越えて參り候ふと申す。

【七】左の諸文章中に假字遣の誤謬あらば正せ。

山を踰へ河を渉る。
物言へば唇寒し秋の風。
過を悔ひて志を改む。
飢へ凍へても志は曲げなひ。
老ひたる人の聲とは覺へず。

【八】「ゐ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【九】「ゑ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【十】左の諸語に振假字せよ。

篩　愛媛　柴螺　愛ふ　植込

胞　錦繪　盥　厭ふ　海老色

第四　「れ」「を」「ほ」の區別

「を」は、一音なるとまたは一語の上部・中部・下部にあるとに拘はらず、「お」の如く讀むことあり。

「ほ」は、一語の中部または下部にある時に限りて、「お」の如く讀むことあり。

「ほ」が、一音なるとき・または一語の上部にある時には、決して、「お」の如く讀むことなし。

故に、「お」の如き音が、一音または一語の上部にある時は、

（お（御）　おぢ（祖父）

（ほ）の區別

などの如く、「お」と「を」と紛るゝことあり。一語の中部または下部にある時は、

（を（尾）　をぢ（伯父・叔父）

（かを（薫）　いさを（功）

（いほり（庵）　ほのほ（焔）

などの如く、「を」と「ほ」と紛るゝことあり。

「ほ」が、一音なる時・または一語の上部にある時は、「お」「を」と紛るゝことなし。

我が國語には、一語の中部及び下部に「お」の假字を書くべき語なし。

「を」と書くべき語

「を」と書くべき語

●を（小）

をうな（女）

をみな（女）

「を」と書くべき語

をみなへし（女郎花）
をぐな（童男）
をとめ（少女）
をぢ（伯父・叔父・舅）
をば（伯母・叔母）
をのこ（男）
をの（斧）
をぶね（苧）
をぐらし（蹙蹙）
●を（尾）
をかつぶ（皿貝）　　をを（裸）
をはり（尾張）　　みをを（操）

をばな（尾花）　　みをつくし（澪標）　　みを（水脈）
をつる（弦）　　をを（十）
●を（緒）
をゞし（鐵）　　ほそのを（臍帶）
●を（峰）
をか（岡・丘・陸・陵）
●をしむ（惜・吝）　　しらをし（遺憾）
をしどり（鴛鴦）
をしく（敷）
●をを（長）
ををなし（幼稚）
ををなご（雜子）

をさめる（治・納・收・修）
をさへ（大概）
●をとり（雉鳥）
わをさをさ（俳優）
●を（学・蔵）
をけ（桶）
をそ（筏）
をだまき（苧環）
●をこ（愚痴）
をこたる（怠）
をこど（隙）
をかし（可笑）

●を（男・雄・夫・壯）
をつと（夫）
をとこ（男）
をらと（夫）
をゝ（蚓）
をんどり（雄鳥）
をゝし（勇壯）
●をちかた（遠方）
をちこち（遠近）
をとゝし（一昨年）
をとつひ（一昨日）
●をり（時節）
をさし（男鹿）
いさを（功績）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
さつを（獵夫）
やもを（鰥夫）

	をりふし（折節） ●をり（居）　かをり（香馨） をり（檻） ●をる（折）　しをり（栞） をがむ（拜）　しをる（萎） をしむ（折敷）　たをやか（嫋娟） ●うを（魚） かつを（鰹） ●あを（青） あをむし（螟蛉） ●をし（唯） をう（唯）

	●をかす（犯）　●ををす（曰）　●ばやを（菖蒲） ●をしかば（尊）　●ををう（徐々） ●をうど（廻廊） ●をどる（踊） ●をのの く（戦慄） ●をめく（叫喚） 〔演習〕 【一】「は」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。 【二】「を」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。 【三】「く」が「う」音便に轉じたる例十箇を擧げよ。 【四】「い」音便にて轉じたる語十五箇を擧げよ。 【五】左の諸語に振假字せよ

故　稗　伯母　宿直　大分縣
杖　斷　叔母　吸物　格子
槐　少女　勳　夕映　候ふ

【六】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

纏（マトヒ）　榮（サカエ）　仰ぐ　長田（オサダ）　織る
率（ヒキイ）　魚（ウホ）　歌（ウト）ふて　やふ〳〵　山田（ヤマダ）
匂（ニホイ）　費（ツイエ）　蝙蝠（カウモリ）　鼻壁（ハナヘキ）　折櫃（オリビツ）

【七】左の諸文章中の縱線を添へたる語に振假字せよ。

尾上にひゞく鍾の聲。
智者は治に居て亂を思ふ。
病起りて後、藥を用ゐて病をせむるは養生の末なり。
德は身を潤す。
逢ふは嬉しく別るゝは悲し。

【八】左の諸文章中に假字遣の誤謬あらば正せ。

名を賣めるは善い事だが、强ゐて求めるは善くなひ。
身を殺して義を全ふす。
饑えたる人に食を與う。
見へかくれに後をおゝて行く。
とかふ云はないで早ふ來給え。

【九】左の諸文章中なる白圈に適當なる假字を塡めよ。

上方で買○て來たといふは關東で買○て來たといふと
となり。
絕○と堪○との假字を誤るな。
老○て悔○る事あるは若き時に○こたりたる報なり。
一度覺○た事は忘れぬやうに習○。
胸襟を開○て語○う。

【十】「を」の假字を書くべき語十五箇を擧げよ。

第五　「は」「わ」の區別

「は」は、一語の中部または下部にある時は「わ」の如く讀むことあり。

「は」が、一音なる時・または一語の上部にある時には、決して「わ」の如く讀むことなし。

故に「は」の如き音が、一語の中部または下部にある時は、

あはせ（袷）　にかは（膠）
さわぐ（騒）　くつわ（銜）

などの如く「は」と「わ」と紛るゝことあり。

「は」が、一音なる時・または一語の上部にある時には「わ」と紛るゝことなし。

「わ」と書くべき語

●わ（曲・輪・回）

あわつ（周章）
あわたゞし（狼狽）
あわゆき（沫雪）
たわむ（撓）
たわやか（嬋妍）
たわやめ（美人）
くつわ（銜・轡）
くるわ（廓）
みわ（酒瓮）
あわ（沫・泡）
みなわ（水沫）
しわ（皺）
しわし（吝嗇）

●かわく（乾）
さわぐ（騒）
さわ〳〵（騒々）
さわやか（爽）
いひわけ（言譯）
いわけなし（幼稚）
くわね（慈姑）
ことわり（理斷）
しわけ（仕分）
のわき（野分）
●ことわざ（事業）
ことわざ（諺）

しわざ（仕業）
●よわし（弱）
いわし（鰯）　ひわ（鶸）
●すわる（坐）
うわる（植）
●こわいろ（聲色）
こわたか（聲高）
●たわら（俵）
●はらわた（腸）

右「わ」と書くべきもの、外は、大抵「は」の假字を書くべし。

〔演習〕

【一】「は」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【二】「ゑ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【三】「ゐ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【四】「ほ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【五】左の諸語に振假名せよ。

巌　浦曲　細　治む　鹽

蕈　小車　腸　行ふ　猟

表　祖父　猶　厩ふ　倒る

【六】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

粟　慈姑　傍　憐む　断

位　心得　葵　所得　幸

澤　不具　際　日向　絶

【七】左の諸文章中の縦線を添へたる語に假字を附けよ。

行を修め學問を勤む。

笑ふ門には福來たる。

看れる平家は遂に衰へたり。

老爺さんに昨日柑子を十ばかり貰った。

祖母と伯母との假字遣は異なるか。

【八】左の諸文章中に假字遣の誤謬あらば正せ。

乙女が筬とりて機織るさまいとをかし。

利を思ふて事を行ふ時は人いきどをる。

君わまだ遠くは行かじ我が袖の袂の涙かはきはてねば。

あはれなるをさな子がをい〳〵と泣き居たり。

苦しい事に堪えなければ樂しひ日には逢ゑなひ。

【九】左の諸文章なる白圏に適當なる假字を塡めよ。

金剛石も磨かずば玉の光○添○ざらん。

あ○れ法皇の流されぬ○しまずぞや。

か○よい子には旅○させよ。

ひ丸ゐす食○ず　逆ゐすがら○ぬずして　思○ゑる　逆なし。

君○中學の業を卒○給○しか。

【十】「ゐ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

第十八　「ゐ」「ぢ」の區別

「ゐ」と「ぢ」とは其の發音殆ど相同じ。

故に「ゐ」の如き音は語の如何なる部分にありても

ゐ（天）　ぢ（柱）　ゐ（實）　ぢ（眉毛）　ゐ（假名）　ぢ（筋目）　ゐ（鯉）　ぢ（伯父母父）

などの如く「ゐ」と「ぢ」と紛るゝことあり。

我が純粹なる國語の中には一音よりなれる語に「ぢ」の假字を書くべきものなく、一語の上部に「ゐ」の假字を書くべきものなし。

語を分ち書く「ゐ」

●ゐ（天）

●ゐる（主人）

ゐる（鷹匠）

ゐ（主婦）

ゐなゐ（蛇）

●ゐなゐる（業）

ゐる（前）

ゐり（量）

●ゐり（鑄）　ゐなゐ（眞）

ゐなり（眦）

ゐり（鍬）

●ゐゐ（假名）

ゐゐ（眉）

●しゝむ（滿）
しゝら（縮羅）
しゝみ（脂）
●たじろく（辟易）
まじろく（瞬）
みじろく（身動）
●つむじ（旋風）
つじ（辻）
●くみじ（甚）
●うじ（胆）
●おなじ（同）
●まじ（雜子）
●あじろ（網代）
●おのがじゝ（各自）
●かじか（鰍）
●かじく（疾）

●ゝじ（圖）
●ゆじ（能）
●すゆまじ（荒涼）
●つゝじ（躑躅）
●にじ（虹）
●はじ（櫨）
●ひつじ（羊）
●かたじけなし（忝）
●ゝじゝ（理）
●ゝじる（扶）
●なまじひ（迷）
●にじる（躙）
●はじむ（始）
●ひじき（鹿尾菜）
●まじなひ（呪）
●まじる（交）
●みじかし（短）
●むじな（貉）
●もじ（際）

右「じ」と書くべきもの〻外は、大抵「ぢ」の假字を書くべし。

〔演習〕

【一】「ぢ」と書くべき語十箇を擧げよ。

【二】「え」の假字を書くべき語十五箇を擧げよ。

【三】「う」音便にて轉じたる語十五箇を擧げよ。

【四】「ひ」が「う」音便に轉ずる例十箇を擧げよ。

【五】左の諸語に振假字せよ。

麹町	廣小路	八日	十日
裘衣	交はる	埼玉	扇屋
叔父	葬る	整ふ	價
		紅葉	揃ふ
			祝ふ

【六】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

養ふて　弟　介添　買ふ　啞

演習

據え　藤　拜む　洗ふ　女

熟寢　虹　彩る　舞ふ　盲人

【七】左の諸文章中の縱線を添へたる語に假字を附けよ。

嗅ひで其の香を知り、食って其の味を知る。

金錢の無きは憂ふるに足らず。

富士の山に牧狩を催して八千人の贊成者を得たりといふ。

よく親に事ふるは貴むべき行の一なり。

鹽は赤穗の產を最も佳とす。

【八】左の諸文章中なる假字遣に誤謬あらば正せ。

雪は白ふ木ずへに降りけり。

ながひ物でみぢかひ物を補う。

こよなふいたわしかりける事どもなり。

己を正ふして然るのち人を責めよ。

祝ふ今日こそ樂しけれ。

【九】左の諸文章なる白圈に適當なる假字を塡めよ。

塵をだに据え○とぞ思ふ。

思ふ○ば思ひ、思○ぬをば思はず。

熊襲また反きて國のさか○を○かしけり。

向○に見○るのは山であ○う。

菊の花うつ○ひさかりなるに、もみ○のちくさに見ゆる時しも。

【十】「を」の假字を書くべき語十五箇の擧げよ。

第七　「ず」「づ」の區別

「ず」と「づ」とは、其の發音、殆ど相同じ。

故に「ず」の如き音は、語の如何なる部分にありても

ず（不）　ずみ（墨）　ずり（硯）　みみず（蚯蚓）

づ（頭）　づばいも〳〵（椿桃）　てづる（手蔓）　なまづ（鯰）

「ず」と書くべき語

我が純粹なる國語の中には、一音よりなれる語に「づ」の假字を書くべきものなし。

「ず」と書くべき語

●ず（不）　かならず（必）

●こずゑ（梢）　みみず（蚯蚓）

●すずし（涼）　はず（箸弭）

すゞ（鈴錫篠）

すずき（鱸）

すずしろ（蘿蔔）

すずな（菘）

すずめ（雀）

●たゞずむ（佇）
ねずみ（鼠）
●いしずゑ（礎）　●かず（數）
●すずり（硯）　●きず（疵）
●すずろ（不覺）　●くず（葛）
●なずらふ（準）　●もず（鶫）
●まゆずみ（黛）

右「ず」と書くべきもの丶外は、大抵「づ」の假字を書くべし。

演習

【一】「じ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【二】下部にある「に」の音が「ゆ」の音にかへらるべき語十五箇を擧げよ。

【三】「づ」の假字を書くべき語十箇を擧げよ。

【四】「い」音便にて轉じたる語十箇を擧げよ。

【五】左の諸語に振假字せよ。

上總國	机	饂	申す
都大路	蓑	鵜	捕ふ
折柄	礎	泉	這ふ

大阪	蠅	吊ふ	佇む
五十鈴川	勢	卜ふ	準ふ
小田原	幸	失ふ	角力

【六】左の假字遣に誤謬あらば正せ。

備ふ　貴し　客　佇む　準ふ　角力
小籠　蚯蚓　吾嬬　吊ふ　卜ふ　失ふ

【七】左の諸文章中の縱線を添へたる語に振假字せよ。

椒蘿蔔・芹・薺は春の七種の中に算へらる。

神の社に詣づる人は先づ鈴を鳴らして蹲る。

君が骨香しきかと梅の花にせ風流男に折りて示さん。

近江の湖を琵琶湖といふ、これ淀川の源なり。

古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。

【八】左の諸文章中なる假字遣に誤謬あらば正せ。

食ふて其の味を知らず。

覺えず固唾を呑んで控えた。

朝顏の種蒔きおえて詠むれば、園の片隅かげらうの立つ。

逢ふは別の始なり。

ついに行く道とはかねて知りしかど、きのう・きよう・とわ思わざりしに。

【九】左の諸文章中なる白圈に適當なる假字を塡めよ。

お○よそ心正なれば身口はお○から清まる。

空飛ぶ雁はい○ち○か行く。

神はよろ○の民をすな○ならしめんとこそし給へ。

花の色、○雪にま○りて見え○とも、香をだにに○へ。

天地○動かし、目に見○ぬ鬼神○もあ○れと思○せ、男女の中をもや○らげ、たけき武士の心○もなぐさむる○、歌なり。

【十】「ず」の假字を書くべき語十五箇を擧げよ。

第三章　字音假字遣

字音を書きあらはす假字の中にて、最も紛れやすきものは、左の二十八組なり。

（一）あう……あふ……れう……わう
（二）い……ゐ
（三）いう……いゅう……ゆう……いふ
（四）え……ゑ
（五）を
（六）かう……こう……かふ……こふ……くゃう
（七）きう……きふ……きゅう
（八）けふ……けう……きょう……きゃう

（九）さう……さふ……そう
（十）しふ……しう……しゅう
（十一）せう……せふ……しょう……しゃう
（十二）たふ……とう……たう
（十三）ちふ……ちう……ちゅう
（十四）てふ……てう……ちょう……ちゃう
（十五）なう……なふ……のう
（十六）にう……にふ
（十七）ねう……ねふ……にょう……にゃう
（十八）はふ……はう……ほふ……ほう
（十九）へう……ひょう……ひゃう
（二十）まう……もう

（二十一）めう……みゃう
（二十二）やう……よう……にう……にふ
（二十三）らう……らふ……ろう
（二十四）りふ……りう……りゅう
（二十五）れふ……れう……りょう……りゃう
（二十六）じ……ぢ
（二十七）ず……づ
（二十八）くゎ　くは

第一　「あう」「あふ」「れう」「わう」の區別

「あふ」……㊀押　狎　鴨　●歴　凹
「おう」……㊁謳　嘔　歐　甌　鷗　●應
「わう」……㊂王　汪　枉　旺　尪　皇　㊃黄　横

「おう」「わう」の區別

●往　鳳

是等の外は、大抵「あう」の假字を書くなり。

「おふ」「わふ」も亦「おう」の如く發音す。されども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二　「い」「ゐ」の區別

「ゐ」……㊀韋　偉　緯　違　葦　圍　㊁胃　渭　㊂尉　慰　㊃唯　維　惟　帷　●爲　位　委　畏　威　遺　彙

「ゐき」……●域　閾　洫

「ゐつ」……●聿　鷸

「ゐん」……㊀員　韻　殞　隕　●尹　允　院

是等の外は、大抵「い」の假字を書くなり。

「い」の如き音が「あ・か・さ・た・な・は・ま・や・ら・わ・に・け・せ・て・ね・へ・め・に・れ・ゑ」の下にある時は、すべて「い」の假字を書き、「う・く・す・つ・ゆ・る」の下にある時は、すべて「ゐ」の假字を書くなり。

第三　「いう」「いう」「ゆう」「いふ」の區別

「いふ」……邑　悒　揖

是等の外は、皆「いう」の假字を書くなり。

「いう」「ゆう」は「いう」と書きても妨なし。

「いふ」「ゆふ」も亦「いう」の如く發音すれども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第四　「ゐ」「ゑ」の區別

「ゑ」……會　繪　回　廻　穢・衛・淮・惠・慧

「ゑい」……衛

「ゑつ」……越　越　鉞　曰・噦

「ゑん」……袁　遠　猿・轅・園　怨・鴛・苑

宛　婉　爰　援・湲・媛・猨　垣

淵・圓・寃

是等の外は、大抵「ゐ」の假字を書くなり。

第五　「を」「お」の區別

「を」……袁　遠　烏　嗚　平・汚・惡

「をく」……屋

「をつ」……脇・越

「をん」……温　蘊　袁　遠　園　怨　苑

穩

是等の外は、大抵「を」の假字を書くなり。

第六　「かう」「こう」「かふ」「こふ」「くう」「こう」「かふ」「こふ」「くう」の區別

區別

「かふ」……㊀合　峪　閤　洽　恰　袷　㊁盍　闔
　　樝　㊂夾　峽　㊃甲　匣　狎　鴨　㊄業

「こふ」……㊅劫　怯

「こう」……㊆公　蚣　㊇工　功　紅　攻　虹　貢
　　鴻　空　控　㊈洪　閧　㊉口　扣　叩
　　吼　荷　㊋后　垢　逅　㊌侯　候　喉
　　猴　㊍毒　構　篝　遘　㊎亘　恒　㊏
　　寇　厚　肯　肱　弘　興　孔　鈎　後　薨

「くわう」……㊐光　晃　恍　晄　㊑皇　㊒曠　壙　礦
　　鑛　㊓皇　徨　惶　遑　蝗　篁　㊔黄
　　横　㊕宏　閎　㊖轟　嶸　荒

きき
きゅうふう
の區別

きけけ
ゃょううふ
の區別

是等の外は、大抵「かう」の假字を書くなり。

「くゎふ」も亦「かう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第七　「きう」「きふ」「きゅう」の區別

「きふ」……㊀及　汲　吸　笈　級　㊁翕　歙　急　泣　給

是等の外は、皆「きう」の假字を書くなり。

「きゅう」は「きう」と書きても妨なし。

「きゅふ」も亦「きう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第八　「けふ」「けう」「きょう」「きゃう」の區別

「けふ」……㊀夾　俠　頰　狹　愜　篋　峽　莢　挾
　　㊁怯　刼　㊂協　脅　㊃業　鄴　㊄叶

「けう」……㊅交　絞　效　校　挍　皎　㊆孝　教

（喬）喬　驕　嬌　橋（蕘）蕘　曉　曉
澆　翹（竅）竅　徼（梟）梟　叫

「きょう」……（共）共　供　拱　恭　蛬（凶）凶　恐　鞏
（匈）匈　恟　兇　胸（興）興　矜　競　凝

是等の外は、大抵「きゃう」の假字を書くなり。

「きょふ」「きゃふ」も亦「きゃう」の如く發音す。されども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第九　「さふ」「さう」「そう」の區別

「さふ」……（挿）挿　雑　匝　颯

「そう」……（總）總　聰（宗）宗　綜（曾）曾　僧
（增）增　贈　憎　繒　層（奏）奏　湊　輳（獻）獻
（宋）宋　送　叢　走　叟

（さふ・そふ）の區別

（しふ・しう・しふ・しう）の區別

（せふ・せう・しふ・しう）の區別

是等の外は、大抵「さう」の假字を書くなり。

「そふ」も亦「さう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第十　「しふ」「しう」「しゅう」の區別

「しふ」……（十）十　什　汁（習）習　摺　褶（輯）輯　楫　葺　濕（隰）隰　拾　執　集　澁　襲

是等の外は、皆「しう」の假字を書くなり。

「しゅう」は「しう」と書きても妨なし。

「しゅふ」も亦「しう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第十一　「せふ」「せう」「しょう」「しゃう」の區別

「せふ」……（妾）妾　接　霎（連）接　睫（渉）渉　業　攝

「せう」……肖　稍　稍　稍　肖　消　峭　逍　銷
硝　小　少　抄　鈔　召　召　沼　招
詔　昭　照　韶　邵　焦　蕉　樵　醮
憔　蕭　簫　嘯　瀟　笑　燒　椒

「しょう」……種　鐘　種　衝　種　公　訟　松　頌　從
從　聳　蹤　縱　束　悚　竦　升　升　昇
丞　丞　蒸　拯　乘　乘　剩　鐘　誦　證

春　勝　承　冗　繩　稱

是等の外は、大抵「しゃう」の假字を書くなり。

「しょう」「しゅう」も亦「しゅう」の如く發音す。されども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第十二　「たふ」「とう」「たう」の區別

「たふ」……答　塔　沓　踏　納　納　榻
「とう」……東　棟　凍　同　洞　桐　筒　銅
董　動　慟　童　童　僮　瞳　豆　豆
逗　頭　鬪　登　登　燈　磴　鄧　滕　滕
藤　騰　等　桶　冬　統　偷　透　兜　賣

是等の外は、大抵「たう」の假字を書なり。

「とう」も亦「たう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第十三　「ちふ」「ちう」「ちゅう」の區別

「ちふ」……蟄　蟄　蟄

是等の外は、皆「ちう」の假字を書くなり。

「ちゅう」は「ちう」と書きても妨なし。

「ちゅう」も亦「ちう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべき

てふ・てう・ちょう・ちゅう・ちゃう の區別

ものなし。

「ちゅふ」も亦「ちゅう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第十四　「てふ」「てう」「ちょう」「ちゅう」「ちゃう」の區別

「てふ」……古　帖　貼　楪　蝶　牒　喋　●　疊

「てう」……朝　朝　潮　兆　兆　晁　挑　誂　窕　眺

召　召　迢　超　超　趙　調　調　凋　彫

鯛　鳥　鳥　蔦　●　吊　釣　條　肇　耀

「ちょう」……家　家　塚　徵　徵　懲　●　澄　重　寵

是等の外は、大抵「ちゃう」の假字を書くなり。

「ちょふ」「ちゅふ」も亦「ちゅう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし。

なふ・のう の區別

にう・ふ の區別

にれ・ょ・うふう の區別

第十五　「なう」「なふ」「のう」の區別

「なふ」……內　納　衲

「のう」……農　農　濃　膿　儂　●　能

「なう」……惱　腦　惱　瑙　囊　囊

「のふ」も亦「なう」の如く發音す。されども、字音に此の假字を書くべきものなし

第十六　「にう」「にふ」の區別

「にう」……●　柔　乳

「にふ」……●　入

第十七　「ねう」「ねふ」「にょう」「にゃう」の區別

「ねう」……饒　饒　鐃　●　尿　溺

「ねふ」……●　捻

「にょふ」……●　女

「にゃう」……女　孃　娘

「にょふ」「にゃふ」も亦「にゃう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第十八　「はふ」「はう」「ほふ」「ほう」の區別（二字漢音）

「はふ」……●　法・乏（二字吳音）

「ほふ」……●　法・乏

「ほう」……鳥　鳳　鵬　剖　菩　卵　朋　崩　冰

矛　袤　峯　逢　蓬　蜂　鋒　烽　縫

本　奉　捧　俸　棒　●　龐　豐　封　邦　昨　謀　畔

是等の外は、大抵「はう」の假字を書くなり。

第十九　「へう」「ひょう」「ひゃう」の區別

「へう」……表　俵　票　漂　標　飄　瓢　●

豹・颱・苗・廟・眇

「ひょう」……水　氷　●　憑

「ひゃう」……平　評　●　病・兵

「ひょふ」「ひゃふ」も亦「ひゃう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二十　「まう」「もう」の區別

「もう」……蒙　濛　艨

是等の外は、皆「まう」の假字を書くなり。

「まふ」「もふ」も亦「まう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二十一　「めう」「みゃう」の區別

「めう」……㊀苗猫㊁妙妙
「みゃう」……㊀明名命鳴冥猛

「めふ」「みゃふ」「みょふ」も亦「みゃう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二十二　「やう」「よう」「にう」「にふ」の區別

「よう」……用用甬俑涌踊㊁庸傭㊂蓉溶㊃雍擁㊄邕癰㊅鷹㊆孕媵蠅
「やう」……㊀陽楊揚煬㊁羊洋佯痒養樣央影瓔
「にう」……㊀遙搖謠㊁要腰㊂曜耀㊃夭妖殀㊄幺拗窈㊅杳姚

「やふ」「ようふ」「にふ」の區別

「にふ」……㊀曄葉

「やふ」「ようふ」も亦「よう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二十三　「らう」「らふ」「ろう」の區別

「らう」……㊀郎廊朗浪狼琅粮㊁老牢勞潦
「らふ」……㊀臘蠟㊁拉
「ろう」……㊀籠瀧朧隴㊁婁樓瘻鏤㊂僂縷㊃陋漏弄

「ろふ」も亦「らう」などの如く發音すされども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第二十四　「りふ」「りう」「りゅう」の區別

「りふ」……立　立　笠　粒
「りう」……卯　留　溜　瑠　霤　柳　劉　流　旒
●　隆　龍

「りゅう」は「りう」と書きても妨なし。
「りゅふ」も亦「りう」の如く發音すされども、字音に此の假字を書くべきものなし。

第二十五　「れふ」「れう」「りょう」「りゃう」の區別

「れふ」……獵　鬣
「れう」……寮　燎　繚　療　寮　繚　僚　鐐　撩　遼
●　了　聊　料
「りょう」……參　寥　蓼
「りゃう」……菱　凌　陵　稜　●　楞　龍
汲　梁　梁　量　糧　療　凉　諒　両

「りょふ」「りゃふ」も亦「りょう」などの如く發音すされども、字音に是等の假字を書くべきものなし。

第二十六　「じ」「ぢ」の區別

「ぢ」……寺　持　峙　痔　尼　尼　●　除　膩　治
「ぢき」……●　直
「ぢく」……由　軸　舳
「ぢつ」……●　帙　昵　暱　●　衂　恠　竺
「ぢん」……●　陣　沈　塵
「ぢよ」……●　女　除　杼　絮
「ぢゃく」……●　著
「ぢょく」……●　濁　匿　兩　魎　令　冷　領　●　靈　亮　良

「ぢゅつ」……㊀ 朮　怵

是等の外は、大方「じ」の假字を書くなり。

第二十七　「ず」「づ」の區別

「ずゐ」……㊀ 隋　隨　髓　瑞　惴　●　蘂

是等の外は、みな「づ」の假字を書くなり。

第二十八　「くゎ」と書くべき字音

菓クヮ　光クヮウ　快クヮイ

觀クヮン　畫クヮク　活クヮツ

などの如く唱ふる字音の拗音なる部分は、すべて、拗音假字「くゎ」にて記す。

以上、二十八組に屬する漢字を暗記し得ば、通常の字音の假字遣を誤ることなかるべきなり。されども、其の數甚だ多くして、容易に暗記し得べくもあらず、且は、暗記すとも、さまで、效益あるものにもあらず。故に、昨今に至りては、世間、往々、簡易なる方法を採りて、現今の人が發音するまゝを書きあらはすものあるに至れり。其の法、大方、左の如し。

「ず」の區別

「くゎ」の假字

字音假字遣の便法

(一)　あう……あふ……おう……わう——おう

(二)　い……ゐ——い

(三)　いう……いふ……ゆう……いふ——いう

(四)　に……ゐ——に

(五)　お……を——お

(六)　から……こう……かふ……こふ……くゎう——こう

(七)　きう……きふ……きゅう——きう

（八）けふ……けう……きょう——きゃう——きょう
（九）さう……さふ……そう——そふ——そう
（十）しふ……しう……しゅう——しう
（十一）せう……せふ……しょう——しゃう——しょう
（十二）たふ……とう……たう——とう
（十三）ちふ……ちう……ちゅう——ちう
（十四）てふ……てう……ちょう……ちゃう——ちょう
（十五）なう……なふ……のう——のう
（十六）にう……にふ——にう
（十七）ねう……ねふ……にょう……にゃう——にょう
（十八）はふ……はう……ほふ……ほう——ほう
（十九）へう……ひょう……ひゃう——ひょう

（二十）まう……もう——もう
（二十一）めう……みゃう——みょう
（二十二）やう……よう……えう……えふ——よう
（二十三）らう……らふ……ろう——ろう
（二十四）りふ……りう……りゅう——りう
（二十五）れふ……れう……りょう……りゅう——りょう
（二十六）じ……ぢ——じ
（二十七）ず……づ——ず
（二十八）くわ——くわ

字音が、連聲によりて、濁音となりたる場合には、其の字音が清音なりし時の假字に標點を加へたる濁音假字を用ゐる。

故に、字音假字遣は、特別の必要あらば、從來の慣例に從

ふべし、然らざるものは、此の便法に據るを可とす。

單語の類別

名詞

第四編　單語の類別

第一章　名詞

鳥飛ぶ。
花が咲く。
東京は日本の大都會なり。
三郎は笛を吹く。
心正し。
苦しみあれば樂しみあり。

右の諸例に於ける、鳥・花・東京・日本・大都會・三郎・笛・心・苦しみ・樂しみなどの如く、事物の名をあらはす詞を名詞といふ。

演習

〔演習〕

次の諸文章中にある名詞を指摘せよ。

【一】小供が獨樂を弄ぶ。

【二】蝶、花に戯る。

【三】天は高く、地は厚し。

【四】吉野山の櫻は最早咲いただらう。

【五】吾は、今、學校に行く。

【六】僕たるものは、能く、主人の命に從ふべし。

【七】朱に交れば赤くなる。

【八】交際は篤きを旨とせよ。

【九】德望ある人は衆人に尊敬せらる。

【十】歡樂極まりて哀情多し。

第二章　代名詞

私が上野に行きます。

汝は書物を讀め。

かれが家に歸りしはいつなりしか。

君はこなたへ來給へ。

太郎ハたれに伴はれたるか。

かなたに見ゆるは富士の山なり。

右の諸例に於ける、私・汝・かれ・いつ・君・こなた・たれ・かなたなどの如く、事物の名に代へて用ゐる詞を**代名詞**といふ。

〔演習〕

次の諸文章中にある代名詞を指摘せよ。

【一】われと思はんものはかしこに行け。

【二】拙者は東國邊の者にて候ふ。

【三】君には常に忠を盡すべし。

【四】そは僕の書物なり。

【五】あなたは、それとこれとの中で、いづれを採りますか。

【六】彼はいづこの者とも知らず。

【七】こゝに一疋の蜂あり。

【八】汝の齡はいくつなるか。

【九】これを見給へ、かれよりも美ならずや。

【十】秀吉はいつ、いづくに生れたりや。

第三章　動作詞

鳥飛ぶ。

花が咲く。

吾は、今、學校に行く。

秀吉朝鮮を討つ。

猫が鼠を捕ふ。

空晴る。

右の諸例に於ける、飛ぶ・咲く・行く・討つ・捕ふ・晴るなどの如く、事物の動作をあらはす詞を動作詞といふ。

動作詞ハ其の語尾を種々に變化す。

例へば、「咲く」といふ動作詞は、

活用

花咲かず、
花咲きぬ、
花咲く、
花咲け、

の如く、「咲か」「咲き」「咲く」「咲け」の四樣に變化す。かく變化することを語尾の活（はたラキ）又は活用といふ。

演習

〔演習〕

次の諸文章中にある動作詞を指摘し併せて其の活用を示せ。

【一】私は手紙を書く。
【二】君は賞を臣下に賜ふ。
【三】娘は母に似る。
【四】三吉は外で紙鳶を揚ぐ。

【五】輕氣球、天に上る。
【六】義貞、馬を深田に乘入る。
【七】人々、降る雪を散る花と見る。
【八】樵夫は米を買ふために薪を賣る。
【九】義經、平家の軍を破る。
【十】兒童に讀書の能力を授くるは恰も智識の充滿せる倉庫の鍵を與ふるが如し。

第四章　存在詞

花あり。

机の上には書物すらなし。

秀吉といふ人あり。

鯨は魚類でない。

外出の時間に制限がある。

此の級には不勉强家は一人もない。

右の諸例に於ける、あり・なし・ある・ない・の如く、事物の有無をあらはす詞を存在詞といふ。

くはしく云へば、存在詞とは事物の有ることを示す詞なれど、此處には、事物の無きこと、即ち非存在を示す詞をも一括して存在詞と呼ぶ。

存在詞も亦動作詞の如く語尾の變化をなす。

例へば、「有り」といふ存在詞は、

花あらず、

花あり、

花あるなり、

花あれ、

の如く、「あら」・「あり」・「ある」・「あれ」の四樣に變化す、これを語尾の活又は活用といふこと動作詞に同じ。

〔演習〕

次の諸文章中にある存在詞を指摘せよ。

【一】苦しみあれば樂しみあり。

【二】其處に往くものと還るものとあり。
【三】世に神ありや、神なしや。
【四】冠をかぶっても猿は猿である。
【五】脅氏は豪傑ではあるが忠臣ではない。
【六】賣言葉ありとも、買言葉を出すな。
【七】よく言ふものはあっても、よく行ふものはすくない。
【八】三郎は世人の誹謗を省る意なし。
【九】飢渇して食を乞ふものあり。凍寒して衣に泣くものあり。
【十】昔、和氣清麿といふ人ありけり。

第五章　狀態詞

花は美し。
富士の山は高い。
水が清い。
風寒し。
樂の音おもしろし。
祝ふ今日こそ樂しけれ。

右の諸例に於ける、美し・高い・清い・寒し・おもしろし・樂しけれ・などの如く、事物の狀態をあらはす詞を**狀態詞**といふ。

狀態詞も、亦動作詞・存在詞の如く、語尾を變化す。

例へば「清し」といふ狀態詞は、

水が清くばよし、
水が清し、
水が清きか、
水清ければ魚すまず、

の如く、「清く」「清し」「清き」「清ければ」の四種に變化す。これを語尾の活又は活用といふこと動作詞・存在詞に同じ。

〔演習〕

次の諸文章中にある狀態詞を指摘せよ。

【一】日本海は深し。
【二】臺灣の氣候の變化は極めて甚し。
【三】藥は苦けれど病に効驗あり。
【四】近きより遠きに及ぼす。

【五】川風寒く、千鳥鳴く。
【六】在明の月の、ほのかに白う見ゆるも、趣ありてうるはし。
【七】人多き中にも人といふべき人はなし。
【八】父母の命に背くことはわろし。
【九】暑中の休暇と試驗後の休暇とは何れか樂しき。
【十】月のある夜道を一人行くのは、淋しいことは淋しいが、亦面白い。

第六章　添詞

美しき花が咲く。

正しき心を持て。

かゝる事はすな。

彼の人に尋ねて見よ。

笑ふ門には福が來る。

言ひたる事は必ず行ふべし。

右の諸例に於ける美しき・正しき・かゝる・彼の・笑ふ・言ひたるなどの如く、名詞・代名詞に添はりて其の意義を限定する詞を添詞といふ。

〔演習〕

次の諸文章中にある添詞を指摘せよ。

【一】富士山は日本一の高き山なるか。

【二】今日、山にて、小き・美しき・鳥を見たり。

【三】往來の人の妨げとならぬやう注意すべし。

【四】彼の花は、櫻に似て白けれど、櫻にあらず。

【五】あしきを去り、よきに附く。

【六】兄弟の睦じくするは餘所目のよきものなり。

【七】夏の夕暮の逍遥はいと快きものなり。

【八】遊ぶ暇ある人の書物讀む暇なしといふは佯なり。

【九】世の中には黑を白と云ひなすものも少からず。

【十】夏の暑きと冬の寒きとはいづれがよきか。

副詞

第七章　副詞

鳥が高く飛ぶ。

私は、昨日、上野に行った。

此の花は白くあります。

此の級に不勉强家は絶えてない。

川風は殊に寒し。

山甚だ高し。

いと美しき花が咲く。

自ら言ひたる事は行ふべし。

右の諸例に於ける、高く・昨日・白く・絶えて・殊に・甚だ・いと・自ら・などの如く、動作詞・存在詞・狀態詞・添詞に副ひて其の意義を限定する詞を副詞といふ。

副詞は、また、

鳥、いと高く飛ぶ、

此の花は甚だ白くあります、

に於ける、いと・甚だ・などの如く、他の副詞にも副ひて其の意義を限定することあり。故に、

副詞は動作詞・存在詞・狀態詞・添詞及び他の副詞に副ひて其の意義を限定する詞なり。

〔演習〕

次の諸文章中にある副詞を指摘せよ。

〔一〕 藩主專ら善政を布けり。

【二】龍田の紅葉も既に紅を染めたり。
【三】志あるものは竟に事を成す。
【四】只今學校より歸る。
【五】櫻花が甚だ美しく咲いた。
【六】友人西に去れり。
【七】拙く行ふは巧に云ふに勝る。
【八】今日は日曜日なれば樂しく遊ばん、
【九】馬は人を乘せて早く走り、牛は車を引きて遲く歩む。
【十】近來、ベースボール・ローンテニスの如き活潑なる洋風の遊戯の頻に、我が國に行はるゝに至りしは、大に喜ぶべき事なり。

接續詞

演習

第八章　接續詞

花並に鳥。
行ひ且つ言ふ。
書を讀み或は畫を學ぶ。
春は來たりぬ、されど、鶯ハ未だ來鳴かず。
右の諸例に於ける、並に、且つ、或は、されど、などの如く、單語又は章句を結び付くる詞を接續詞といふ。

〔演習〕

次の諸文章中にある接續詞を指摘せよ。
【一】かしこに立てるは君子若しくは花子ならん。

【二】汝は文を好むか又は武を好むか。

【三】山を踰え又河を渉る。

【四】寸は即ち一尺なり。

【五】此の傘は、雨天にもよろしく、亦晴天にもよろしし。

【六】我が友は今日も復來たりぬ。

【七】秀吉は英雄なり、而も、小牧の陣に敗をとりぬ。

【八】降雨久しく續きぬ、それ故に、河々の水嵩もいたく增したり。

【九】音樂を學ぶことは好まず、されど、之を聽くことは好めり。

【十】幼童は常に、心を學問に止めて、智識を收めざるべからず、而して、其の收めたる後は、之を實用に施さゝるべからず。

第九章　助用詞

鳥、甚だ高く飛びたり。

花、美しく咲きぬ。

予は終夜勉强したることもありき。

三吉が次郎に犬を打たしめらる。

騷ぎたるものは、自ら、其の名をいふべし。

かれは未だ出立たじ。

右の諸例に於ける、たり・ぬ・たる・き・しめ・らる・べし・じ・などの如く、動作詞・存在詞の意義の完からざるものに添はりて其の意義を完からしむる詞を**助用詞**いふ。

助用詞も、亦動作詞・存在詞・狀態詞の如く、語尾を變化す。

例へば「たり」といふ助用詞は、

鳥高く飛びたらむ、
鳥高く飛びたり、
鳥が高く飛びたるか、
鳥こそ高く飛びたれ、

の如く「たら」「たり」「たる」「たれ」の四樣に變化す。これを語尾の活又は活用といふことと動作詞・存在詞・狀態詞に同じ。

〔演習〕

次の諸文章中にある助用詞を指摘せよ。

【一】無用のもの入るべからず。

【二】胃の張りたるは飲食したるゆゑなり。

【三】桓武天皇延曆寺を建てさせ給ひけり。

【四】朝廷は勅使として某侍從を遣はされたり。

【五】老人琴の音を松風ときゝたり。

【六】菅公は、諱を道眞・字を三・とぞ云はれける。

【七】いつの時に都には着きたらん。

【八】秀吉、浮田秀家をして、命を諸將に傳へしむ。

【九】汝は馬に乘ることを習へりや。

【十】天皇、五位の藏人二人を召して、民の愁を聽かしめ給ふ。

豆爾乎波

第十章　豆爾乎波

鳥が甚だ高く飛びたり。
花は美しく咲きぬ。
一人の兵士が、今門の前を過ぎた。
君と僕とは年來の知己なり。
東京より大阪まで何里ありや。
次郎、三吉に犬を打たしめたり。
人生には幸福ばかりあるものにあらず。
某こそは級中第一の勉强家なれ。
右の諸例に於ける、が・は・の・を・と・より・まで・や・に・ばかり・こそ・などの如く、諸種の言語の中間にありて、其の關係を明かにし、且つ、其の意義を完からしむる語を豆爾乎波といふ。

演習

【演習】

次の諸文章中より豆爾乎波を指摘せよ。

【一】光陰は流水の如し。
【二】親として子を思はぬは絶えてなし。
【三】樵夫は米を買はんがために薪を賣る。
【四】義光、足柄山までは、時秋を伴ひけり。
【五】耻を知らざる人は世に棄てらる。
【六】花は咲きたれども鳥は歌はず。
【七】藤房卿、勅をうけ給はりて、楠正成をぞ召されける。
【八】正成は朝敵を追討すべきことを正行に遺訓せり。
【九】季重こそ此の山の案内能く存知仕りて候へ。
【十】死にたる鮒水面に浮びたり。

感動詞

演習

第十一章　感動詞

彼ははや行きけるよ。

あさましの世の中や。

人の心は愚なるものかな。

たれをかも知る人にせん。

老いにけるよな。

月の前の燈は無くもがな。

右の諸例に於ける、よ・や・かな・もな・がな・の如く、感動したる時に發する詞を感動詞といふ。

〔演習〕

次の諸文章中にある感動詞を指摘せよ

【一】こはそも如何なる事に候ふぞや。

【二】身の上の事とは知らざりけりな。

【三】それ敵兵の寄せたるは。

【四】夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。

【五】在明の月を待ちいづるかな。

【六】げにおもしろのけしきやな。

【七】海人の小舟のつなでかなしも。

【八】君よ待ち給へ、申すべき事の候ふ。

【九】時の間の煙ともなりなむとぞ打見るよりもおもはるゝ。

【十】月なき夜半は、いとゞ心のすみまさるものなりけり。

第十二章　詞の品類

單語

「白き」「鳥」「高く」「飛び」「たり」などの如き一語一語を單語といふ。

詞の品類

單語をそれ〴〵の特質に隨ひて分類したるもの、即ち名詞・代名詞・動作詞などを詞の品類といふ。

以上學びたる所によりて、詞の品類には十一種あるを知る。即ち左の如し。

- 名詞
- 代名詞
- 動作詞
- 存在詞
- 狀態詞
- 添詞
- 副詞
- 接續詞
- 助用詞
- 豆爾乎波
- 感動詞

演習

次の諸文章中にある詞の品類を區別せよ。

【一】友人、吾に手紙を贈れり。

【二】白きは染りやすし。

【三】如何なる御方に渡らせ給ふぞ。
【四】朝は五時に起き、夜は十時に臥すべし。
【五】明日、授業終らば遠足せん。
【六】馬は人を乘せて早く走り、牛は車を引きて遲く歩む。
【七】彼を呼び、叱り、而して諭せ。
【八】己を正しうして然るのち人を責めよ。
【九】予は此の馬を左甚五郎が作りたりとは思はず。
【十】雪は野原を埋むとも老いたる馬ぞ道は知る。

國語法階梯　終

國語法階梯
定價金三拾三錢

明治三十三年六月二十日印刷
明治三十三年六月廿三日發行

東京市牛込區矢來町三番地
著作者　永井一孝

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
發行兼印刷者　大日本圖書株式會社
有代表者
專務取締役　宮川保全

發行所
東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
同　支社

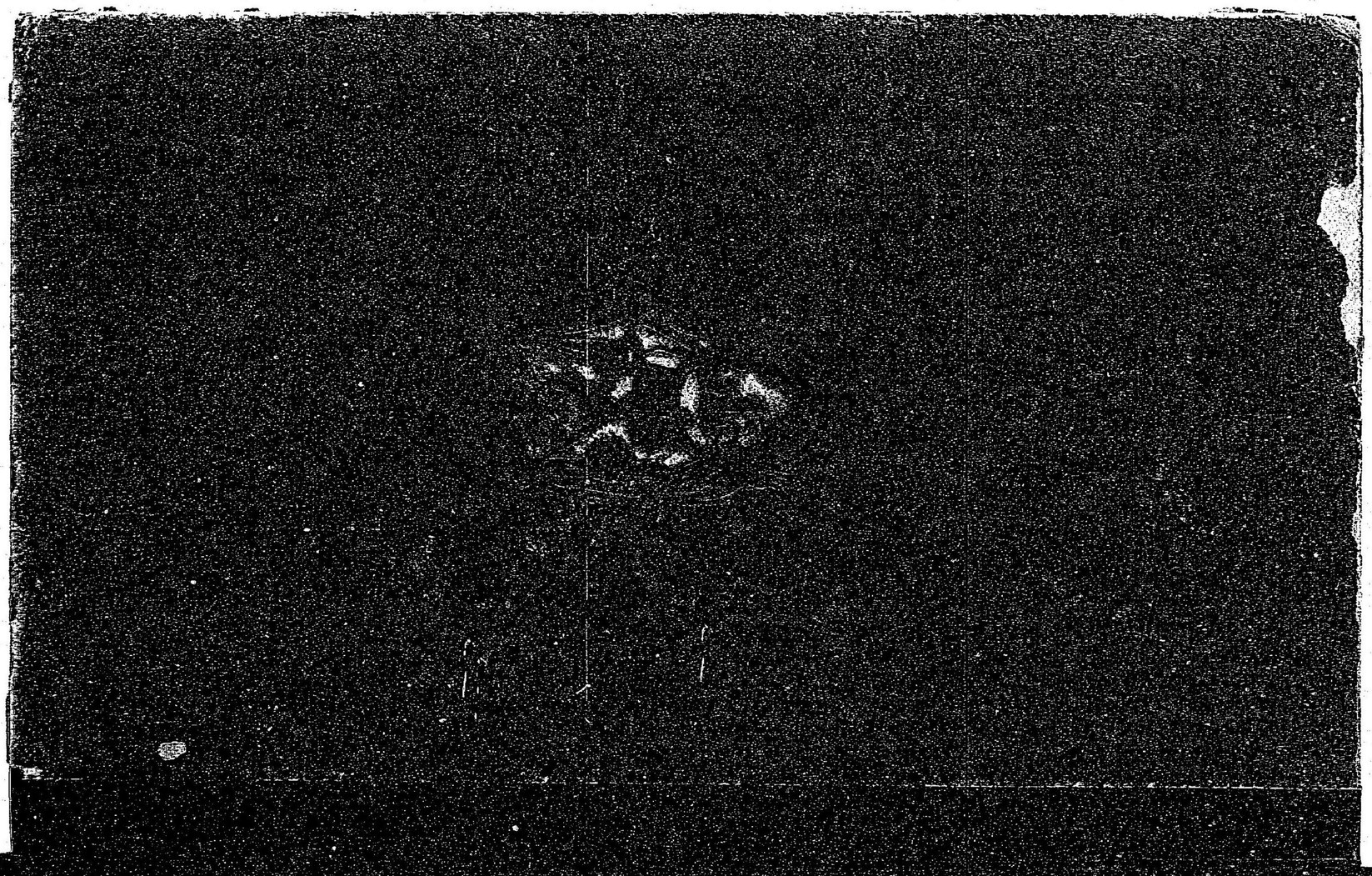
不許複製

所賣販約特許圖版出社會式株電圖本日大

○長原町、丸橋、路口防、水野、林、鶴谷、西田、大谷、長島、文林堂、佐野、中丸堂、中西屋、其次堂、鶴岡屋、
井筒屋、賀來館、日高、共榮商社、其濱株式社、北陸館、松邑、宮山、宇治木、森江、三見、○大阪屋、三木、佐
原、柳屋、石井、市川、岡島、丸榮支店、吉岡、金川、鈴鹿館、金尾、中井、小谷、中村、中川、吉原、松村、此村、
田中、北村、赤田、○長崎屋、村上、藤井、松田、河合、佐林、○神奈川縣、田沼、丸屋、武藤堂、○鶴岡縣、
川上、藤瀨、吉見、谷沼、藤岡、文林堂合社、大石、○山梨縣、柳正堂、清水、○愛知縣、川淵、佐野、○三重
縣、柴田、岡西商會合社、安藤、○長崎縣、四澤、初瀨館、水谷堂、丸山、酒川、小林、佐川、今村、日新堂、
文正堂、土橋、成文堂、大坂屋、新井、○群馬縣、橋爪堂、文江堂、文心堂、木田、中村、○埼玉縣、長島、水
野、水村、田沼、○千葉縣、多田屋、切野、坂、平野、酒井、○栃木縣、內山、北城、佐藤合、○茨城縣、
川又、此文堂、明文堂、伊沼、○福島縣、田中、丁子屋、成屋、西文堂、○宮城縣、浦藤株式、木文商店、法龍堂、
○青森縣、佐藤、文榮堂、○山形縣、牧野、八文字屋、藤井、成文堂、日向、伊藤、鈴木、白崎、○秋田縣、
土屋、成見、藤島、佐藤林、大澤、○青森縣、鎌田、伊藤、加山、今泉、○北海道、小國、豐岡、白崎、川崎、
池田、藤文舍、二宮、山本、坂上谷、山崎、○新潟縣、北光社、藤波、目黑、松田、四村、宇、高橋、中山、○
富山縣、中田、學海堂、○福井縣、大北、吉川、四村、○石川縣、近田、宇都宮、○長崎縣、藤谷、中井、岡
崎、石田、木村、○長崎縣、明治舍社、木原、○和歌山縣、宮井、○愛媛縣、都文堂、藤文堂、○香川縣、宮
島、大江、藤井、○德島縣、藤崎、○鹿兒島縣、向井、土屋、○高知縣、澤木、岡成舍、○廣島縣、鈴木、原田、
○岡山縣、武內、○島根縣、川岡、岡山、大澤、安藤、○高知縣、堀堂、鶴岡、今井、○山口縣、小原、白鳥、
鐵川、○福岡縣、鶴竹、藤崎館、藤岡、○佐賀縣、長崎、坂原、○長崎縣、小野、玉藤堂、安中、○大分縣、
中島、牧山、野澤、林、○宮崎縣、岩井、林屋、佐野、河野、谷、○佐賀縣、河村、○熊本縣、吉田、久
永、○鹿兒島縣、鶴見城、有馬、仲井間、○鹿兒島縣、三善堂、○沖縄縣、ワ、ア、ス

明治三十三年四月號

87
32



87
32

078325-000-4

87-32

国語法階梯

永井　一孝／著

M33.6
DAC-1958